

「水稲＋麦」の体系で大臣賞

◆稲・麦わらを全量すき込み

福岡県前原市の井田磯和さんは、「平成15年度全国麦作共働会」で農林水産大臣賞を受賞した。井田さんは、稲わら、麦わらを全量すき込み、腐熟を早め地力を高めるため、基肥を兼ねて“石灰窒素”を施用している。

井田さんが住む前原市は、福岡県の西端、糸島地方の東南部に位置し、東は福岡市、西は二丈町、南は背振山系を境として佐賀県、北は志摩町にそれぞれ接している。

井田さんは大規模土地利用型の「水稲＋麦」体系に取り組んでいる地域農業の若手リーダーだ。

栽培面積は水稲13.1ha、麦20.9haだが、これを通年借地で計画的に増やしている。今後、地域水田農業の担い手として、さらに作付けを拡大することだ。

◆高い地下水位の悪条件

この地域は、前原市の西に位置し、海拔0mの干拓地で砂質土壌である。基盤整備はおこなわれておらず、かつては塩田として利用していた圃場が多い。したがって、地下水位が高く、水(潮)が逆流するところで、条件はよくない。そこで、農地を集積して排水対策を徹底させ圃場を改良し、基本技術を適期して、高品質で安定した収量を実現した。

麦作にはとくに地力の向上に力を入れている。珪鉄を2年ごとに200kg/10a散布したり、ホールクroppサイレージ用稲後の圃場に牛ふん堆肥1t/10a投入するなど、有機物や土壌改良材の施用につとめている。

このほか、石灰窒素40kg/10a(窒素8.0kg)、BMようりん20kg/10a(リン酸4.0kg)を施用し、カリは使用していない。

◆石灰窒素は機械で散布

石灰窒素を使用するきっかけについて井田さんは「石灰窒素は肥持ちがいいのは知っていたが、圃場が広く手散布はとても無理なので、化成肥料を使用していた。21年前、トラクターを購入して散布を機械化したので、石灰窒素＋PK化成をはじめた」とのこと。現在は、麦わらすき込み—米作—稲わらすき込み—麦作の栽培体系のなかで、つぎのような基肥を兼ねた土づくりをおこなっている。

①稲わらすき込み(石灰窒素40kg/10a 施用) —2週間—小麦播種

②麦わら深くすき込み(石灰窒素30kg/10a施用) —水稲

この方法で土が団粒構造になることを実感している。石灰窒素の効果としては「肥持ちがよく、とくに冬場の肥効が長くつづき色落ちがしない」「土壌の酸性矯正効果」をあげている。

井田さんは今後の課題として「小麦は平成17年度産麦から新しい品質のランクづけが導入されるので、これらの品質評価に応えられる小麦づくりをめざしたい」と意欲的である。